

2022
第8回

これからの建築士賞

「建築士」は日本の都市と建築にかかわる重要な職能資格であり、設計監理、施工、行政、教育、まちづくり、発注者など幅広い業務に携わりながら、未来につながる社会の実現のため努力してきました。近年では防災、環境、高齢化と人口減少、歴史文化の喪失など多くの課題の中で、その専門的な知見を生かしながら、魅力的な社会、街並み、建築空間の実現を目指して活動しています。

なかでも最近は他の建築関係の会とも連携し、それぞれの地域をベースにした協働も盛んになってきており、これらの新たな活動が大きな波となって地域社会の未来に力となる事も期待されています。多様な分野における建築士ならではの新しい動きに光を当て、顕彰し、支援するとともに広く世の中に伝えようとするのが「これからの建築士賞」の目的です。

募集要項

1. 賞の対象

都市と建築に関わる近年の活動や業績で、設計監理、施工、行政、教育、まちづくり、発注など建築士としての多様な立場を通じて行った未来につながる社会貢献に対して、その活動・業績を担った建築士もしくはそのグループを顕彰する。未来につながる社会貢献とは、たとえば、美しい景観の形成、安全で魅力的なまちづくりや空間の提案、自然環境や歴史的環境の保全、地球温暖化・人口減少・高齢化社会に対する提案、弱者に対する対策、文化・にぎわい・コミュニティの創出、建築に関する啓蒙・普及など多様であるが、さらに、これからの建築士の仕事を開拓するような、従来の建築士の枠を拡げる活動の応募も大いに期待したい。

2. 名称及び受賞数

これからの建築士賞 10点程度（但し、応募点数による）

3. 応募資格

原則として建築士もしくは建築士を含むグループで、活動のベースが首都圏にあること。過去の応募者の再応募は可とします。審査員が直接係った案件は応募対象から除外される。また審査員が所属する事務所、グループが審査対象となる場合は、その案件に係る一切の審査から外れるものとする。

4. 応募方法

別紙候補推薦書に記入の上、必要に応じて参考資料をA4用紙3枚以内にまとめて、事務局まで提出のこと。関係資料は返却されないものとする。郵送、メールによるデータの送付も可能。候補推薦書は東京建築士会ホームページからダウンロード可能。自薦、他薦を問わない。

審査結果

入賞5点（応募点数9点）

1	業績名	11-1 studio	5	業績名	地域共創型コミュニティパーク coconova
	候補者名	Yosuke SAGOSHI Atelier 砂越 陽介		候補者名	株式会社CAT 加納 佑樹、松谷 昂毅、孫 瑠華、関矢 陽弘
2	業績名	ともにつくる文化を創る 参加型リノベーションの実践			
	候補者名	つみき設計施工社 河野 桃子・河野 直			
3	業績名	児童養護施設に関わる一連の設計活動ほか			
	候補者名	伊藤 潤一、宇田川 奈緒子			
4	業績名	都市部の空洞化局面におけるエリア再生の3つ仕組みの構築と醸成			
	候補者名	青木 公隆			



審査員による総評・講評および入賞作品の詳細は、こちらからご覧いただけます。
<https://tokyokenchikushikai.or.jp/award/pdf/korekara-vol.8.pdf>



過去の受賞提案こちらからご覧いただけます。
<https://tokyokenchikushikai.or.jp/award/index05.html>

関連情報：話題の書籍

これからの建築士 — 職能を拓ける 17 の取り組み

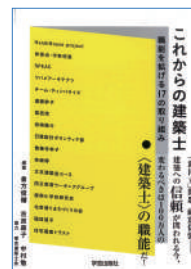
建築への信頼が問われる今、変わるべきは 100 万人の＜建築士＞の職能だ！

第1回これからの建築士賞審査結果を紹介した『これからの建築士—職能を拓ける 17 の取り組み』（編著：倉方俊輔、吉良森子、中村勉 協力：東京建築士会）が出版されました。この賞の内容が詳しく掲載されています。

全国の書店・ネット書店で販売

定価：2,530 円（税込）
発行：学芸出版社

<http://www.gakugei-pub.jp/>



総評文

石川 初 (慶應義塾大学 環境情報学部 教授)

今年度、この賞の審査員を初めて担当いたしました。これが8回目となる賞で、すでに7年の歴史があるということにあらためて驚きました。「これからの」建築士という語には、これまでの建築士から発展し、あるいは外れて建築士が活躍できる領域や対象を開拓しつつある、そのような意味が込められているのだと思います。しかし、これまでの7年間の受賞者の皆様の仕事を拝見すると、7年前からすでに建築士の活躍場所は多岐にわたっていて、つまり建築士の仕事がありうる多様さはすでに示されてきたように思えます。そこで、これからの「これからの建築士」に授賞する要点は、応用する建築思考のもととなるもの、建築士ならではの思想やスキルが発揮されたかどうかではないかと思います。私自身は建築の専門家ではないのですが、だからこそ一層、建築士にそのような「さすが建築士！」という職能の輝きを期待しました。これからの「建築士」というわけです。今回の応募作の多くはそうした建築士の職能に立脚しつつ「これから」を期待させる仕事でした。審査の過程で繰り返された深く真摯な議論も勉強になりました。応募下さった皆様ありがとうございました。

大竹 由夏 (ものづくり大学 技能工芸学部 建設学科 講師)

昨年に続き審査させていただきました。今年の応募では、自身の事務所を中心にまちづくりへと発展する活動、参加型リノベーション活動、プロダクトデザインやデジタルファブリケーションなど他分野での活動、社会貢献や福祉活動など、建築という枠組みに捉われない、これからの建築士に期待する作品が多くみられ、多様化する建築士の活躍を、興味深く拝見させて頂きました。昨年はオンラインによる審査でしたが、本年は対面による審査となり、より議論が活性化されたように思います。「これから」という新たな視点だけではなく、「建築士」「建築」という点に着目して評価させて頂きました。建築士でないとできないものなのか。建築士だからこそできたものなのか。建築として魅力的な作品であるか。他のデザインではなく建築だからこそそのデザインなのか。魅力的な建築を手がけ、建築を土台とした活動を継続している。このような期待に応えてくれた5作品を選出できたことを嬉しく思っております。



石川 初 (いしかわ はじめ)

慶應義塾大学環境情報学部教授、博士(学術)／1964年生まれ／1987年東京農業大学農学部造園学科卒業／鹿島建設建築設計本部、米国HOKプランニンググループ、株式会社ランドスケープデザイン設計部を経て、2015年より現職／著書に「思考としてのランドスケープ 地上学への誘い」(2019年度造園学会賞)

「ランドスケール・ブック」「今和次郎『日本の民家』再訪」(瀝青会として共著、2012年度日本建築学会著作賞、日本生活学会今和次郎賞)など／2018年度東京農業大学造園大賞「ランドスケープから“地上学”へー場への新たな概念形成とランドスケープの裾野を広げる多面的展開」



大竹 由夏 (おおたけ ゆか)

ものづくり大学講師、博士(デザイン学)／1982年生まれ／2006年筑波大学芸術専門学群卒業。2016年同大学院修了。2019年～東京建築士会事業委員／博士論文「漫画の場景と実際の眺望に基づく東京タワーの景観の保全・活用に関する提案」／主な作品に「筑波大学芸術専門学群A棟2階エントランス展示空間及び展示スペース」、「[待庵] 原寸再現模型(建築の日本展:その遺伝子のもたらすもの)」。

高井 啓明 (株式会社 竹中工務店 設計本部 プリンシパルエンジニア)

応募の作品は、総数が9件と少ないながらも、新しい動きを提示する練られた作品が多く見られました。地域の技術再生を重ね合わせた町工場の改修と実践、ゼネコンの枠にはまらない建築士としてデザイン公表、参加型リノベーションの実施とセルフビルド実践のワークショップ、デザインのデジタルアーカイブ公開プラットフォーム、海外の学校整備プロジェクト、今まで注目されなかった児童養護施設の分野における設計・調査研究活動、Park-PFI活用の公営温浴施設の建替えプロジェクト、都市部の地域に根差した空き家利活用の実施と仕組みの構築、地域の診療所のコミュニティ施設への改修、と提案は様々でした。

その中で、ストックの再活用や改修の提示案が5件あり、いずれも表彰されたことが時代を映していると感じます。これらは直接的に脱炭素に寄与するものではないかもしれませんが、社会課題への取組みが真摯に見られる提案であり、これからの建築士の人たちに大切なインスピレーションを与える事例であると思いました。地域の人たちを巻き込むセルフビルドも大切なキーワードになっていると思います。



高井 啓明(たかい ひろあき)

1982年竹中工務店入社、2001年設計部設備部門マネージャー、2015年から設計本部プリンシパルエンジニア(環境)／専門分野は建築環境設計／国交省建築環境部会委員、日本サステナブル建築協会理事、空衛学会理事(歴任)、CASBEE研究開発委員会幹事、日建連サステナブル建築専門部会主査等／表彰は、井上宇市記念賞(2021)、稲門建築会特別

功労賞(2022)、空衛学会賞技術賞・十年賞・振興賞、サステナブル建築賞、カーボンニュートラル賞、ASHRAE Technology Awards First place Winnerなど多数

古谷 誠章 (東京建築士会 会長／NASCA／ 早稲田大学 創造理工学部 建築学科 教授)

昨年に続いて、賞の審査に加わりました。前年にもまして、この賞がスポットを当てようとする建築士の幅広い活躍のフィールド、様態などに大変意義深いものを感じました。というのも、今日の建築士の社会における使命は、単に単体の建築の依頼に応じて設計を行うといった旧来の姿とは大きく異なり、むしろ社会にとって無くてはならないものの、空間や制度などを自らが構想し、実現し、または実現を働きかけることに、大きくシフトしていると思われるからです。建築士自らが地域住民の交流の場を提供するばかりでなく、地域に潜在するリソースを掘り起こして再度ネットワークを築くといった、社会的な役割を果たし、活発でレジリエントなコミュニティを創りだすなど、地域住民のコミュニティ活動の要となるもの、またはこれまで陽の当たらなかった各種施設での生活環境に光を当て、継続的にそれらを改善していく活動、公共に代わって民が担って形づくるパブリックスペースの企画やその実現など、いずれも建築士活動の幅広い基盤を支える大変尊いものを感じました。この場を借りて応募された皆さんに心から敬意を表したいと思います。



古谷 誠章(ふるや のぶあき)

1955年東京生まれ／1980年早稲田大学大学院理工学研究科修了／1980～1986年早稲田大学理工学部助手／1986～1994年近畿大学工学部講師／1986～1987年文化庁芸術家在外研修員(マリオ・ボッタ事務所)／1994年早稲田大学理工学部(現創造理工学部)助教授、NASCA設立／1997年～同教授／2017～2019年日本建築学会第55

代会長／2021年～東京建築士会第16代会長／主な作品：「茅野市民館」、「小布施町立図書館」、「喜多方市新本庁舎」、「道の駅たのはた思惟の風」他／主な受賞：2011年日本芸術院賞「茅野市民館」／2014年日本建築大賞「実践学園中学・高等学校自由学習館」／2015年日本建築学会賞(業績)「『失われた街』模型復元プロジェクト」他

1

11-1 studio

11-1 studio

ジュウイチノイチスタジオ

砂越 陽介

Yosuke SAGOSHI Atelier 代表
11-1 studio 代表

豊島区池袋と板橋区の区界付近にある町工場街の一角、旧アイロン台工場を改修した、シェア工房・シェアカフェ・設計事務所から成る小規模複合施設です。

かつてはこの通りに軒を連ねていた町工場群。時代が進むにつれ、事業承継されず廃業し空地となって集合住宅等へと建替えとなったものの、事業承継されてその3代目が操業を続けるものも今後5~10年以内に事業主の定年を迎える等、その後のビジョンは見えていません。

このプロジェクトは建築家である候補者自身が、町工場だったこの場所を改修し運営することで、近隣の町工場を含めた将来へのオルタナティブを示していくものです。



下記1~3それぞれをセクターとして別々に分立するのではなく、ゆるく連続的に同空間に併存させることで交流を生み、今は断片状になってしまった「都市の生態系(=ものをつくり、なりわいを営むネットワーク)」を、現状の都市の中に今の時代の感覚で再編していきます。

1. 地域に開いた工房とスタジオとキッチンを持つ設計事務所

設計事務所にとって、工房は他の町工場やメーカーとの接続部であり、スタジオとキッチン(シェアカフェ)は街や現代を生きる生活者や起業家との接続部です。そして工房とシェアカフェが隣接する空間はそれらの創造的な活動と日常的な活動の接続部となっています。



2. ネイバーインキュベーション

シェアカフェを中心とするスタジオは、近隣の生活者が現代の新しいなりわいの可能性に触れ、そこへの一歩を踏み出し、気軽に試行錯誤したり実践したりできる場となっています。そこの新しいなりわいの可能性が物質的な創作の現場であるシェア工房と隣接することで、新たな共創や事業、プロダクトを生み出します。

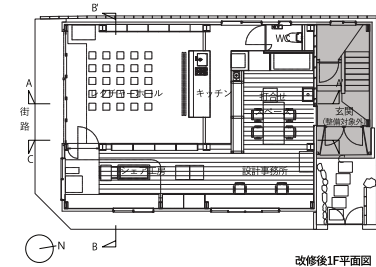


3. 町工場の今後を示すオルタナティブ

そうして生まれたネイバーインキュベーションの場を町工場街へと「開かれたネットワーク」にすることで、町工場の今後「事業承継か廃業か」ではないオルタナティブを示していきます。



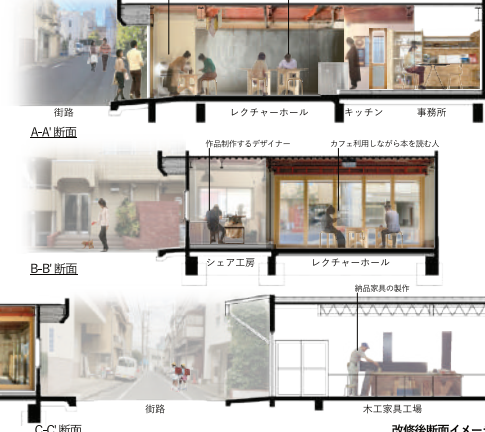
※写真：小川重雄



改修後1F平面図

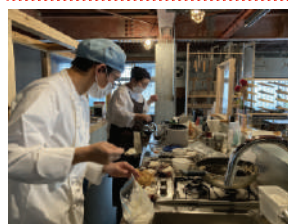


改修後断面イメージ

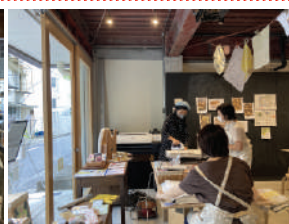


改修後断面イメージ

※断面イメージの点線は実際にこれまで1年半ここで行われた活動から作成した



※写真：小川重雄



※写真：小川重雄



※写真：小川重雄

01. 地域の技術を使う



02. 地域の技術を活かす



03. 地域の技術を活かす



04. 地域同士をつなぎ、新しいものを創る



※写真：小川重雄

木工所等の町工場のある都内地域において、旧アイロン台工場を改修し、その中に設計事務所、工房、スタジオを設えた実施事例である。地域に開き、地域のシェア工房とスタジオにしていく構想を持つ。改修して2年が経過し、スタジオにおけるワークショップでは、工房でつくりたいという意思を持つ近隣の生活者と、つくる技術を直に教える木工、左官、溶接等の専門家たちとの交流が始まっている。来場者がカフェの出店者になるような変容も起きている。地域のコミュニティ形成に留まらず、地域

の人たちと技術を持つ人々を地域に根付いた技術でつなぎ、新しいものを創ることが目論まれており、その実践が少しずつ進んでいる。

本作品は、空き空間の改修に、技術再生を重ね合わせているところが大きな特徴となっている。工具や大工道具を透視してみせる等のデザイン性も優れ、自ら実践を始めたところであるが、さらなる「これから」に期待したい。

高井 啓明

2

ともにつくる文化を創る参加型リノベーションの実践

ともにつくる文化を創る 参加型リノベーションの実践
 つみき設計施工社（河野桃子・河野直）



つみき設計施工社は、「ともにつくる」を理念として、河野直・桃子が2010年に起業した設計施工の会社です。参加型リノベーションという手法を開発し、12年間実践を続けてきました。実践を通じて見てきた「社会的価値」や「広がり」があります。



人と空間をつなぐ場を生み出す - これからの建築士の仕事

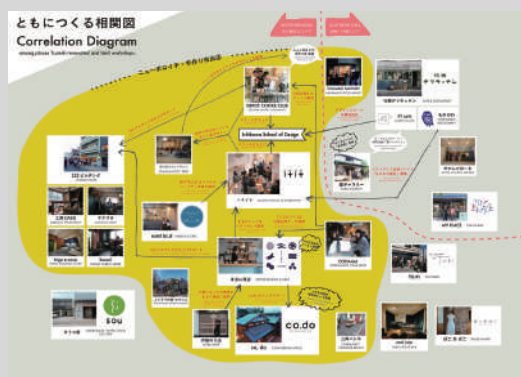
設計者・施工者・住まい手の三者が、学び合い、ともにつくることで建築をつくりだす行為は、関わる全ての人にとってもっと豊かなものになるのではないかとこの問いが私たちの出発点です。市川周辺に根差す職人と手を組み、2010年から参加型リノベーションの実践を行ってきました。改修現場を舞台に12年で約400回以上のDIYワークショップを開催し、参加者は数千人に上ります。

住み働く市川で50を超える「ともにつくる」実践

2015年にオフィスと自宅のある千葉県市川市で集中的に活動することを宣言しました。エリアを限定することで、ともにつくるが生み出す効果を相乗的に高めることができるのではないかと。また、住まわちで実践を重ねることで初めて、「つくり手」である私たち自身が「使い手」ともなり、より深いレベルで「ともにつくる」というビジョンを体現できると考えたからです。それから7年、これまで市内で54箇所（住宅・店舗・公共空間）の参加型リノベーションを実践してきました。

ともにつくる文化を日本と世界に広げる

日本のローカルで培った「ともにつくる」という文化を世界に広げていくことが、つみき設計施工社の次のミッションです。現在は、参加型リノベーションノウハウの国内での普及と、米国サンフランシスコや韓国ゲンサンなど海外での実践にも注力しています。資本主義が覆い尽くす世界の中でも、人々が助け合って豊かに生きる相互扶助という文化が、失われることなく脈々と続いていくための一助になりたいと考えます。



市川市内の参加型リノベーションマップ（現在54件）



ノウハウをまとめた書籍『ともにつくる DIYワークショップ』出版

応募者は千葉県市川市を拠点に、過去12年間に市内の50を超えるプロジェクトについて、いずれも発注者や住民が工程のどこかでDIYに参加する形で、建築を完成させてきた。設計者、施工者、住まい手、さらには近隣住民が、ともに建築を自らの手でつくり出す行為が、単に出来上がった空間に対する愛着や主体性を高めるだけでなく、地域の職人の手ほどきを受けることを通して、将来のセルフメンテナンスを促したり、ワー

クショップを通じて近隣住民同士の交流を育むなど、多角的な価値につなげた点が素晴らしい。コミュニティが生み出すこうしたつながりは、子育て世帯や独居高齢者に対する住民同士の支援、さらには万一の災害時には迅速できめ細かい共助にも大きく寄与するものと期待します。

古谷 誠章

3

児童養護施設に関わる一連の設計活動ほか

児童養護施設に関わる一連の設計活動ほか

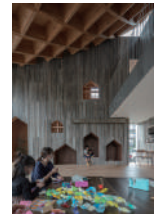
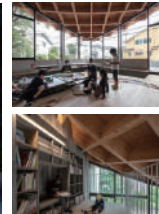
伊藤潤一 宇田川奈緒子

「施設」から「家」へ — 子ども達の心と体に働きかける建築の可能性を探求する —

児童養護施設 そだちのシェアステーションつぼみ + 児童養護施設ショートステイ施設 (新築)

■反り屋根の下に集う、子育てをシェアする居場所

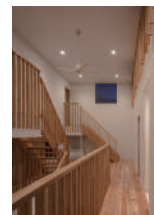
特徴的な反り木格子の屋根で覆われた交流スペースは、歩行者や地域住民からも内部の様子が良く見える。
 地域住民にも開かれたこの施設は、子ども達や子育てに悩む親などが、自由な時間を過ごすことができる様々な場が用意されている。
 隠れ家的な空間や図書スペース、見晴らしのよい明るい窓際の場所などお気に入りの場所をみつけられる地域の止まり木である。



児童養護施設 房総双葉学園小規模グループホーム (新築)

■子ども達の生活を、地域へ染み出させる

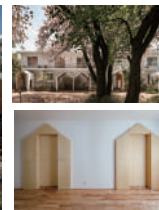
この施設では、建物中央に高さ1.3mの空間を設けることで、子ども達の生活の様子が、地域に染み出す。
 プライバシーは守りながらも、子ども達を地域住民が見守ることで、子ども達と職員の安全を担保している。
 一般住宅とは異なる、児童養護施設独自の内外空間のあり方、街との関係を意識しながらも、子ども達や職員が生活の中で、エスケープできるアジールとなる多様な場を作り出している。



児童養護施設 子供の家 (改修)

■子供が考えた家型モチーフが、施設の内外を繋ぐツールとなる

家型のモチーフを、「施設を家に変換するツール」と位置づけた。
 家型は子供が考えたこの施設のシンボルマークでもある。
 家型を門や駐輪場、建具、家具などに用いる共通アイコンにすることで室内外に一体感を持たせた。
 改修前にはワークショップを行い、計画案を子供たちと考えた。
 工事中には、箸づくりのワークショップを行い、鉋がけを体験することで、職人技の凄さを目の当たりにしてもらった。



児童養護施設 長田子どもホーム (改修)

■自分たちがインテリアをカスタマイズできる施設

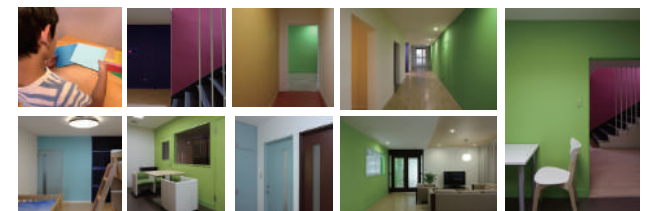
OSBボードで、壁や手摺などの空間のアクセントをつけ、空間をカスタマイズするツールとした。
 ワークショップを通して製作した「箱型ショーケース」を、OSBボードに取り付けることで、本棚やインテリア小物で自分たちの家や部屋を飾るといったカスタマイズができる。
 現実には限られた期間しか滞在しない子ども達自身が、ここが自分の家という帰着心、部屋に愛着をもつ工夫が必要なのである。



児童養護施設 目黒若葉寮 (改修)

■子ども達を「彩りのある世界」で育てる

「若葉色」を施設の基本カラーに据え、共用部の壁、事務室の家具や文具なども同色で統一感を生み出した。
 8室ある子どもの部屋は、全て異なるイメージカラーを用いて、それぞれに個性をもたせている。
 スタッフと子どもで選んだイメージカラーは、「様々な色の個性を受け入れるよ」という子ども達へのメッセージでもある。



Jun'ichi Ito Architect & Associates

建築士として新たな児童養護施設を提案している。「施設から家へ」という理念のもと、ワークショップを積極的に取り入れた設計プロセスを実現している。従来の養護施設は「必要な施設」の設計となっていたが、本活動では「質的改善のされた生活空間」の設計となっており、要支援児童や職員など利用者からの評価も高いようだ。施設というハコモノが、魅力

ある建築物として設計されており、地域の住民からも関心の目が向けられているのではないと思う。また、全国への児童養護施設をめぐり紹介するなどの福祉分野への啓蒙活動も行なっていることも賞賛に値する。今後の活動も期待している。

大竹 由夏

4

都市部の空洞化局面におけるエリア再生の3つ仕組みの構築と醸成

業績名

都市部の空洞化局面における
エリア再生の3つ仕組みの構築と醸成候補者名
青木 公隆

日本全国の空き家は増加の一途を辿っている。都市部でも例外なく、木造密集市街地等の狭隘道路や無接道敷地を要因として、駅に近接し、開発が促進されるポテンシャルがあるにも関わらず、空き家が多く存在し、地方同様に都市部でも空き家の増加とそれに伴う地域の安全や防災等の問題が深刻化している。北千住駅周辺地域も同様に空き家が多く、足立区で空き家率が最も高い地域である。一連のプロジェクトは、都市部における空き家利活用の促進を図り、エリア再生を図るプロジェクトである。この地域に拠点を構える私たちを中心として、全体をコーディネートして、全プロジェクトの進行を務めており、3つの仕組みの構築を実現した。この3つの仕組みにより地域のまちづくりやエリア再生を牽引している。

〇空き家利活用プラットフォーム

公民連携型空き家利活用による情報集約・拡散・空き家発掘

建築士としての関わり

活動団体の代表、空き家所有者への助言や交渉、イベント企画
空き家利活用希望者との面談、建築物の活用に向けた助言

足立区とともに設立された千住 Public Network は千住地域の空き家利活用プラットフォームである。本事業の目的は、対象区域において、空き家利活用のプラットフォームを構築し、空き家を地域資源として捉えて、対象区域の空き家利活用を促進することである。特に重要な取り組みは、空き家発掘である。都市部の空き家問題の特徴として、空き家は多いが、空き家関連の交渉が所有者と進まなく、そのまま放置されるケースが多い。空き家発掘に向けて多くの取組みを実施したが、有効な手法として、地元で詳しい不動産業者との連携や、近隣居住者から足立区への連絡を元にして、所有者との交渉を行うことが有効であった。

〇まちづくりファンドの組成

空き家の不動産市場への回復に向けた資金的仕組みの導入

建築士としての関わり

千住地域の空き家利活用のポテンシャルの向上、
改修に向けたファンド資金の検討、重点地区の設定

公民連携型空き家利活用プラットフォームを中心とした千住地域の空き家利活用の普及、「せんつく」という空き家利活用のパイロットプロジェクトの存在により、千住地域のまちづくりとしての機運の高まりが認知され、地域金融機関によるまちづくりファンドの組成に繋がった。

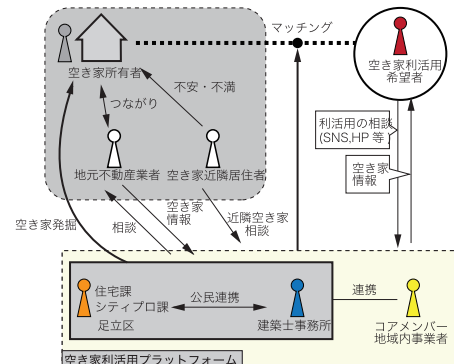
〇多機能多拠点型施設「せんつく」

アップデートをし続ける拠点モデル

建築士としての関わり

空き家改修のコンテンツ検討、事業費用の出資、設計、
自社運営、地域におけるパイロットプロジェクトの提示

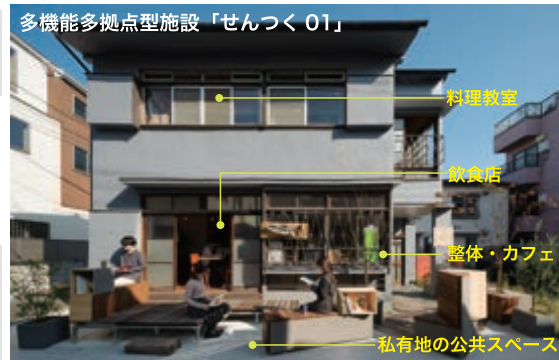
「せんつく」は、地域の空き家利活用やまちづくりを牽引するモデルになることに加えて、日々の活動内容・地域課題を次のせんつくへの入力値として捉えている。この入力は、次の「せんつく」において活用され、新たなコンテンツやイベント、地域との関わり方を構築していく。現在は、せんつく03に着手しており、最終的に千住地域に10拠点の形成を目指している。駅から離れた地域を中心として増えている不動産市場からこぼれ落ちた空き家を、多機能多拠点という新しい形で再生し、地域社会に還元する取組みである。



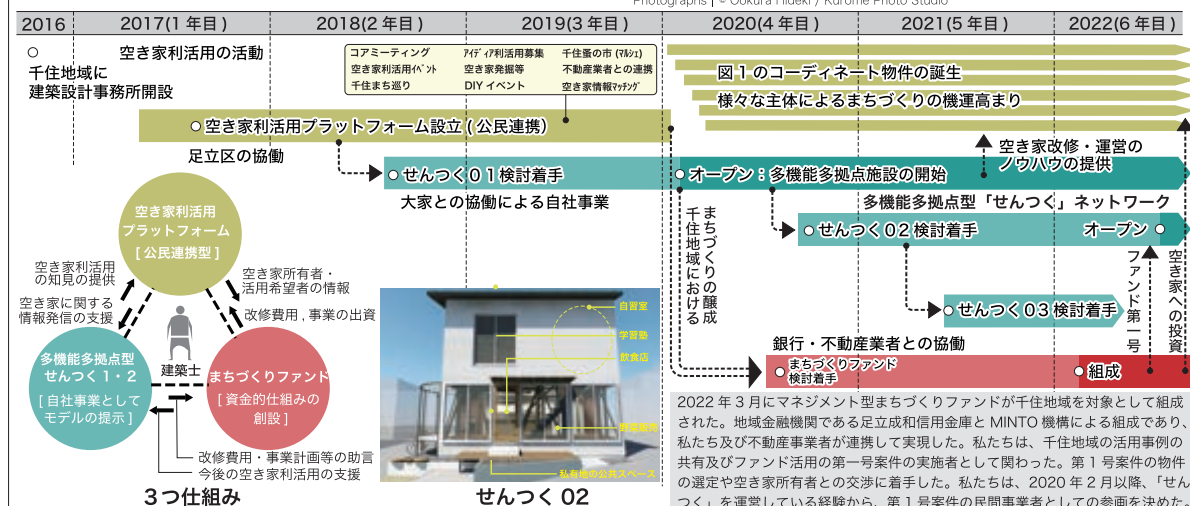
公民連携型空き家利活用プラットフォームの概念図



地域資源の発掘 | まち巡り 空き家利活用の勉強会 空き家の改修を体験



Photographs | © Ookura Hideki / Kurome Photo Studio



都市部の住宅密集地域における人口減少による空き家の増加に対して、空き家の利活用のための情報共有プラットフォーム、改修費用の調達や利活用支援のためのまちづくりファンド、そして「せんつく」と名付けられた利活用のモデルとなる空き家改修の実施、これら3つのプロジェクトによって対象地域の再生と維持を図るプロジェクトである。建築が呼ばれる契機、建築を実現する資源、そして建築が役立つ様子、これらをも

時に手掛けることでその地域における建築の意味を作り出している。「せんつく」の外見に派手さはないが、そこに長くあった風景を丁寧に継承しているようだ。「これからの建築士」のあり方のひとつとして賞賛するに相応しい。

石川 初

5

地域共創型コミュニティパークcoconova



地域共創型コミュニティパーク coconova

株式会社 CAT 加納 佑樹・松谷 昂毅・孫 瑞華・関矢 陽弘

地域共創型コミュニティパーク coconova（ココノバ）は沖縄県北部の名護市の市街地に位置する、地域の診療所をリノベーションして整備された、新しい形の地域のコミュニティ施設＝地域 commons である。名護市および沖縄は豊かな自然などの観光資源に恵まれた土地である反面、辺野古基地（名護市）などに代表される基地問題や、全国での最低賃金が最下位であること等、地域の構造的課題を抱える課題先端地域としての側面を併せ持つ場所である。本計画は建築士の参画するまちづくりスタートアップおよび設計事務所がタッグを組む形で企画から運営および更新までを一貫して行い、地域住民の参画、地域内外の人々の場所への関わりや動線の創出（関係人口形成等）を皮切りに、地域の価値を更新していくまちづくりの起爆剤となるようなプロジェクトである。

地域をエンパワーするコミュニティ建築として、更新、伸縮、拡張可能な建築空間を設計し、地域住民の主体的な参加による、共創的な commons メイキングを行っている。これらの活動は、地域内外の人々の需要に合わせた形でハードの伸縮および拡張を行うソフトデベロッパーとして、場所の価値を発明・更新し、地域の価値を向上させる「まちづくりプラットフォーム」として、多領域を包括する。地域の社会圏とエコシステムのデザインそのものを包括するコミュニティアーキテクチャ設計の提示により、地域の可能性を持続的かつ、共創的に醸成していく新たな場所のあり方を目指したプロジェクトである。



遊びから仕事まで見つけれられる「やってみたい」が生まれる場

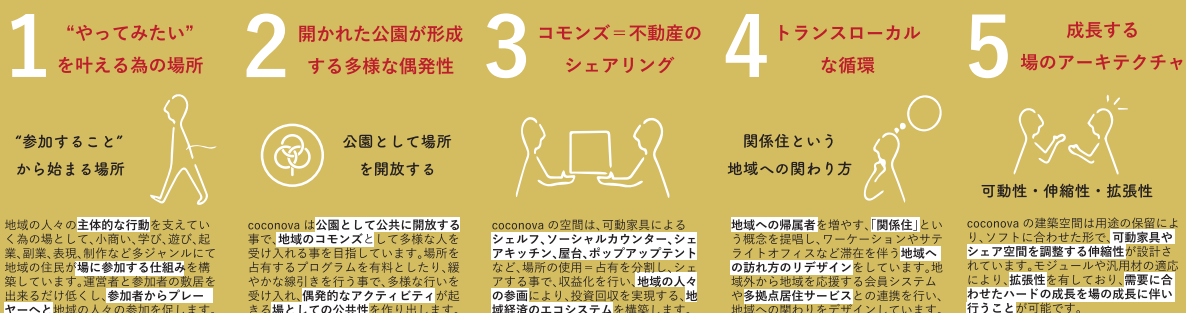
フリーマーケットなどの開催による、地域のプラットフォーム運営

可動家具やシェア型の家具により、空間を多様にシェアしていくことが可能

地域を共創し、共に豊かに成長していくための『共創型地域 commons』



あたらしい『共創型』の地域 commons メイキングにおける手法



建築士の参画するまちづくりのスタートアップ及び結成事務所がタッグを組む形で行っているプロジェクトである。地域住民の参画、地域内外の人々の関わりや導線の創出しており、昨年から応募頂いていた作品である。昨年は「これから」が漠然としていたが、1年経ち、commons メイキングの実現が明らかになってきた。公共性と事業性を橋渡しするプログ

ラムと、地域住民の主体的な参加が、まちづくりの起爆剤となっており、地域の価値の向上にもつながるであろう。今後もコミュニティアーキテクチャとしての活動を継続して頂きたい。

大竹 由夏